

藩学から明治の中学校への連続性に関する考察

神 辺 靖 光

はじめに

近世に興り、幕末から明治初年に全国的に展開した藩学は戊辰の役における藩没収と廃藩置県によって設置母胎を失い、廃校に追い込まれた。しかるに実際は維持者を替え、名称を変えて近代学校に連続したものが多かったとする説がある。例えば春山作樹は明治四十年、東京帝国大学における教育史の講義で、「藩校は明治維新ののち師範学校若しくは中学校に変形したるもの多し。」⁽¹⁾と述べ、昭和十年にはこれを次のように敷衍した。

「藩校は明治の廃藩置県と同時になくなったが、それが基礎となつて新式の中学校・師範学校が府県の経営として成立したものもある。また私立学校として存続したものもあり、新たに設けられた中学校が藩校の名称を襲いだ例もある。校舎・蔵書等が新式の中学校・師範学校等に引継がれ、利用された例は一層多い。」⁽²⁾（岩波講座『日本歴史巻七』）

また松浦鎮次郎は

「学制頒布の直後に於て従来の藩学其他当時府県に発達したる学校は悉く閉鎖を命ぜられ、学校の設立は凡て新学制に依らざるべからざることになったことは前述した通りであるが、実際に於て大藩中藩の藩学は多く府県の手に移り、学制に準拠して中学となった。」⁽³⁾と述べ、高橋俊乗も、

「明治四年、廃藩置県を機として全国の藩学は一旦ことごとく政府の命令により廃校になったが、鹿児島・山口等有力な藩の学校は高等学校として残り、その他は中学校または小学校・幼稚園に継承され、あるいは校名を伝えている。」⁽⁴⁾と述べている。

『中学教育史稿』の著者・桜井役は右の如き総括的な叙述をさけているが、藩学と関連を持つ中学校二校をあげている。⁽⁵⁾しかしこれらは藩学旧跡との関連、旧藩主・旧藩士の関わり、時間的断絶、名跡及び伝統の継承等の考察に乏しく、右の区別なく雑然と羅列したにすぎない。果して藩学は近代の学校に連続したか。連続とみてよい中学校があったのか。あったとすれば如何なる意味で連続とみたのか。「学

校沿革史」を用いてこれらを究明しようとするのが本論の課題である。

一

明治から現在までに刊行された旧制中学校・新制高等学校の沿革史

で藩学から起筆しているもの三九校分、四三部を得た。それを東北から西南に配列したのが「表一」である。「沿革史」の発行者はすべて当該学校である。と言うことはその学校が藩学の後裔であると自認し、或は自負しているということである。

〔表一〕 藩学を淵源とする明治の中学校（学校沿革史によるもの）

| 藩名 | 藩学名 | 中学校名 | 学校沿革史名 | 発行所 | 発行年月 |
|------|-----|-------------------------|---|--|--|
| 弘前藩 | 稽古館 | 弘前市立中学東奥義塾・青森県立弘前中学東奥義塾 | 『東奥義塾沿革誌』 『東奥義塾再興十年史』 『東奥義塾九十五年史』 『鐘ヶ丘百年史』 『仙台一高六十年史』 『沿革史』 『会津中学校五十年史』 『富岡高校七十五年史』 『校史・千葉県立佐倉高等学校』 『創立七十周年記念誌』 『高田高等学校百年史』 『創立五十周年記念録』 『福井県藤島高等学校百年史』 『武生高校七十年史』 『清陵八十年史』 『沼中東高八十年史』 『静中静高百年史』 『時習館史』 『成章八十年史』 | 弘前市立弘前中学東奥義塾 財団法人東奥義塾 学校法人東奥義塾 青森県立弘前高等学校 宮城県立仙台第一高等学校 山形県立米沢興譲館中学校 福島県立会津中学校 群馬県立富岡高等学校 千葉県立佐倉高等学校 新潟県立村上高等学校 新潟県立高田高等学校 福井県立福井中学校 福井県立藤島高等学校 福井県立武生高等学校 長野県立諏訪清陵高等学校 静岡県立沼津東高等学校 静岡県立静岡高等学校 愛知県立時習館高等学校 愛知県立成章高等学校 | 明治四一年 昭和六年六月 昭和四二年一〇月 昭和五八年一〇月 昭和三一年一〇月 昭和一年九月 昭和四六年一〇月 昭和四六年一月 昭和四六年五月 昭和四六年三月 昭和四八年一〇月 昭和六年一〇月 昭和三一年一月 昭和四四年七月 昭和五六年一月 昭和五六年三月 昭和五三年九月 昭和四四年二月 昭和五八年四月 |
| 仙台藩 | 稽古館 | 青森県立弘前中学校 | | | |
| 米沢藩 | 興譲館 | 宮城県立仙台第一中学校 | | | |
| 会津藩 | 日新館 | 山形県立米沢中学校 | | | |
| 七日市藩 | 成徳館 | 福島県立会津中学校 | | | |
| 佐倉藩 | 成徳館 | 群馬県立富岡中学校 | | | |
| 村上藩 | 克従館 | 千葉県立佐倉中学校 | | | |
| 高田藩 | 修道館 | 新潟県立村上中学校 | | | |
| 福井藩 | 明道館 | 新潟県立高田中学校 | | | |
| 福井藩 | 明道館 | 福井県立福井中学校 | | | |
| 府中藩 | 立教館 | 福井県立武生中学校 | | | |
| 高島藩 | 長善館 | 長野県立諏訪中学校 | | | |
| 静岡藩 | 兵学校 | 静岡県立沼津中学校 | | | |
| 静岡藩 | 学問所 | 静岡県立静岡中学校 | | | |
| 豊橋藩 | 時習館 | 愛知県立第四中学校 | | | |
| 田原藩 | 成章館 | 田原町立中学成章館 | | | |

| | | | | | |
|------|-----|------------|----------------------------------|-------------------------|---------------------|
| 名古屋藩 | 洋学校 | 愛知県立第一中学校 | 『鯨光百年史』 | 愛知県立旭丘高等学校 | 昭和五二年一〇月 |
| 津藩 | 有造館 | 三重県立第一中学校 | 『あゝ母校・創立百年記念誌』 | 三重県立津高等学校 | 昭和五五年一〇月 |
| 彦根藩 | 弘道館 | 滋賀県立彦根中学校 | 『彦中五十年史』 | 滋賀県立彦根中学校 | 昭和二年五月 |
| 姫路藩 | 好古館 | 兵庫県立姫路中学校 | 『姫中・姫路西高百年史』 | 兵庫県立姫路西高等学校 | 昭和五三年一〇月 |
| 新宮藩 | 育英堂 | 和歌山県立新宮中学校 | 『新高八十年史』 | 和歌山新宮高等学校 | 昭和五八年三月 |
| 鳥取藩 | 尚徳館 | 鳥取県立鳥取中学校 | 『創立五十年史』 | 鳥取県立鳥取第一中学校 | 大正一一年一〇月 |
| 松江藩 | 修道館 | 島根県立松江中学校 | 『鳥取西高百年史』 | 鳥取県立鳥取西高等学校 | 昭和四八年一〇月 |
| 津山藩 | 修道館 | 岡山県立津山中学校 | 『松江北高等学校百年史』 | 島根県立松江北高等学校 | 昭和五一年二月 |
| 福山藩 | 誠之館 | 広島県立福山中学校 | 『岡山高校八十周年記念誌』 | 岡山県立津山高等学校 | 昭和五〇年五月 |
| 広島藩 | 修道館 | 私立修道中学校 | 『福山誠之館中学校沿革史』 | 広島県立福山誠之館中学校 | 昭和七年八月 |
| 岩国藩 | 養老館 | 山口県立岩国中学校 | 『修道中学校史』 | 修道中学校代表・香川秀作 | 昭和六年七月 |
| 山口藩 | 明倫館 | 山口県立萩中学校 | 『岩国高等学校九十年史』 | 山口県立岩国高等学校 | 昭和四四年三月 |
| 山口藩 | 明倫館 | 山口県立山口中学校 | 『山口県立萩高等学校百年史』 | 山口県立萩高等学校 | 昭和四八年三月 |
| 西条藩 | 明善堂 | 愛媛県立西条中学校 | 『山口県立山口高等学校百年史』 | 山口県立山口高等学校 | 昭和四七年五月 |
| 松山藩 | 明教館 | 愛媛県立松山中学校 | 『輝け道前の群像』 | 愛媛県立西条高等学校 | 昭和五四年一〇月 |
| 松山藩 | 明教館 | 私立北予中学校 | 『愛媛県立松山東高等学校百年史』 | 愛媛県立松山東高等学校 | 昭和五三年一〇月 |
| 宇和島藩 | 内徳館 | 愛媛県立宇和島中学校 | 『北予中学校沿革史』 | 元社団法人北予中学会 | 昭和五一年一月 |
| 福岡藩 | 修猷館 | 福岡県立中学修猷館 | 『宇和島東高等学校沿革史』 | 愛媛県立宇和島高等学校 | 昭和五一年一月 |
| 小倉藩 | 思永館 | 福岡県立豊津中学校 | 『修猷館七十年史』 | 福岡県立修猷館高等学校 | 昭和五一年一月 |
| 久留米藩 | 明善堂 | 福岡県立中学明善校 | 『福岡県立豊津高等学校七十年史』 | 福岡県立豊津高等学校 | 昭和五一年一月 |
| 佐賀藩 | 弘道館 | 佐賀県立佐賀中学校 | 『明善校九十年史』 | 福岡県立明善高等学校 | 昭和五一年一月 |
| 平戸藩 | 維新館 | 長崎県立中学猶興館 | 『米城創立八十周年記念誌』 | 佐賀県立佐賀西高等学校 | 昭和五二年二月 |
| 琉球藩 | 国学 | 沖縄県立第一中学校 | 『猶興百年史』 | 長崎県立猶興館高等学校 | 昭和五六年三月 |
| 山口藩 | 明倫館 | 山口高等学校 | 『養秀創立八十周年記念』 | 沖縄県立首里高等学校 | 昭和五六年三月 |
| 鹿児島藩 | 造士館 | 鹿児島高等学校造士館 | 『山口高等商業学校沿革史』 『記念誌・第七高等学校造士館』 | 山口高等商業学校 第七高等学校記念祝賀会 | 昭和五五年二月 大正一五年一〇月 |

〔表二〕 藩学を淵源とする明治の中学校（学校沿革史によらないもの）

| 藩名 | 藩学名 | 中学校名 | 出典 | 発行所 | 発行年月 |
|-----|------|-----------|-------------------------|---------------------|-----------------|
| 龍野藩 | 敬楽館 | 兵庫県立龍野中学校 | 『揖保郡地誌』 志賀正道『岡山藩学校史』 | 揖保郡役所 細麗舎書店（岡山市） | 明治三三年 八月 |
| 岡山藩 | 花鳥教場 | 岡山県立岡山中学校 | 『全国学校沿革史』 | 東都通信社 | 大正 三年 一月 |
| 高知藩 | 致道館 | 高知県立第一中学校 | 同 右 『高知市史』 | 同 右 高知市役所 | 同 右 大正 九年 三月 |
| 柳河藩 | 伝習館 | 福岡県立中学伝習館 | 『全国学校沿革史』 | 東都通信社 | 大正 三年 一月 |
| 鹿島藩 | 弘文館 | 佐賀県立鹿島中学校 | 同 右 | 同 右 | 同 右 |
| 鹿島藩 | 徳讓館 | 佐賀県立鹿島中学校 | 『佐賀県教育五十年史中篇』 | 佐賀県教育会 | 昭和 二年 五月 |

未見の「沿革史」があろう。よって『全国学校沿革史』『岡山藩学校史』『揖保郡地誌』『高知市史』『佐賀県教育五十年史』でこれを補足し、五校を加えた。これが〔表二〕である。『全国学校沿革史』は大正のはじめ、東都通信社が初等教育を除く日本全国の学校に原稿を依頼して編集したものであるから、これもまた当該学校が藩学の後裔と自認していたことになる。『岡山藩学校史』は昭和九年、当時、旧岡山藩学跡地にあった岡山県女子師範学校の校長・菅原信治が岡山藩学と岡山県師範学校、同中学校の連続意識が薄れたことを遺憾として同校教諭・志賀正道に著述せしめたものである。⁽⁷⁾『揖保郡地誌』は揖保郡役所が、『高知市史』は高知市役所が、『佐賀県教育五十年史』は佐賀県教育会が編さん発行したものである。それぞれ在地当事者の認識であるから参考に付した。

藩学の名称は時期によって異なる。本表では「沿革史」に載った名称で存続期間の長いものをとった。中学校の名称も時の流れに沿って変る。明治十三年までは公立・私立の中学校の外、仮中学、準中学、変則中学、師範学校中学校、同予備科等々。明治十四年以後十八年までは府県立、町村立、私立の中学校。十九年から府県立、私立、及び府県管理の尋常中学校と官立及び文部省管理の高等中学校。二十六年から郡立、町村組合立の尋常中学校と尋常中学支校、分校が加わり、明治三十二年の「中学校令改正」で府県立、郡市町村及び町村組合立、私立の中学校となって名称上の変動がおさまる。⁽⁸⁾本表では明治三十二年以降の名称、とりわけ明治末年の名称に照準した。⁽⁹⁾この名称が概して継続したからである。たゞし東奥義塾、成章館と山口、鹿児島の高等中学校については例外である。東奥義塾の創立は明治五年であるが、

「中学校令」による私立尋常中学校になったのは明治二十九年。三十五年弘前市立に変わり、四十三年に青森県立となり、大正二年一たん廃校となる。故に本表では弘前市立、青森県立の校名を並記した。愛知県渥美郡田原町に成章館が開設されたのは明治三十四年である。成章館は田原尋常高等小学校に附設された二年制の各種学校であった。これが田原町立中学成章館になったのは大正五年である。後に渥美郡立、愛知県立中学校になるが、本表では大正五年時の名称をとった。高等中学校の名称は明治二十七年六月に終る。故にこの時の名称をとった。

二

通常「学校沿革史」は創立年を起点とし、発行年若しくはその数年前を終点として何年史と名づける。よって発行年から逆算して各中学校の起点を求めた。何年史と銘を打たないものも多くは何周年記念等の副題があるのでそれに従い、それもない場合は章立てに従った。例えば『福山誠之館中学校沿革史』は第一章・誠之館時代、第二章・中学校時代となっているので第二章の劈頭、明治十二年七月の広島県福山中学校開設を起点とした。次いで各中学校が自校の溯源とする藩学校の叙述の仕方を目次によって調査した。

「学校沿革史」における明治の中学校の起点のとり方には統一がない。これを類型化しても意味がないので対蹠的なものを例示しよう。複雑な叙述を避けて略年表によって対照する。

『修猷館七十年史』と『時習館史』

明治一八年・私立英語専修修猷館創立。

同 二二年・福岡県立尋常中学修猷館となる。

中学修猷館の起点は明治一八年。

明治二六年・私立補習学校時習館創立。

同 二八年・豊橋町立尋常中学時習館となる。

同 三三年・愛知県立愛知第四中学校となる。

中学時習館の起点は明治三三年。

『姫中姫路西高百年史』と『清陵八十年史』

明治一一年・播磨六郡組合立姫路中学校創立。

同 一七年・播磨十四郡組合立姫路中学校となる。

同 二〇年・兵庫県立尋常中学校となる。

姫路中学校の起点は明治一一年。

明治二八年・諏訪郡立諏訪実科中学校開設。

同 三四年・長野県立諏訪中学校となる。

諏訪中学校の起点は明治三四年。

『成章八十年史』と『彦中五十年史』

明治三四年・田原町立成章館開設。

大正 五年・田原町立中学成章館となる。

同 一一年・愛知県立田原中学校となる。

田原中学校の起点は明治三四年。

明治一三年・彦根町立彦根中学校開設。

〔表三〕「学校沿革史」における中学校の起点と藩学の記述

| 校 史 誌 名 | 中 学 校 の 起 点 | 藩 学 の 記 述 |
|--|--|---|
| 『東奥義塾九十五年史』 『鐘ヶ丘百年史』 『仙台一高六十年史』 『沿革史・山形県立米沢興譲館中学校』 『会津中学校五十年史』 『富岡高校七十五年史』 『校史・千葉県立佐倉高等学校』 『創立七十周年記念誌』 『高田高等学校百年史』 『創立五十周年記念録』 『福井県藤島高等学校百年史』 『武生高校七十年史』 『清陵八十年史』 『沼中東高八十年史』 『静中静高百年史』 『時習館史』 『成章八十年史』 『鯨光百年史』 『あゝ母校・創立百年記念誌』 『彦中五十年史』 『姫中姫路西高百年史』 『新高八十年史』 『創立五十年』 『鳥取西高百年史』 | 明治 五年 一月・東奥義塾創立 明治 一七年一〇月・青森県中学校設置 明治 二五年 四月・宮城県尋常中学校設置 明治 一九年 九月・私立米沢中学校「中学校令」による 明治 二三年 四月・私立会津中学校創立 明治 三〇年 四月・群馬県尋常中学校甘楽分校設置 明治 三二年 四月・千葉県立佐倉中学校開設 明治 三三年 四月・新潟県立新発田中学校村上分校設置 明治 五年 八月・私立高田分校開設 明治 一五年 一月・福井県立福井中学校設置 安政 二年 六月・藩学明道館創立 明治 三一年 三月・福井県武生尋常中学校設置 明治 三四年 四月・長野県立諏訪中学校開設 明治 三四年 四月・静岡県立沼津中学校設置 明治 一一年 九月・静岡師範学校に中学課付設 明治 三三年 四月・愛知県第四中学校開設 明治 三四年 四月・田原町立成章館創立 明治 一〇年 二月・愛知県中学校開設 明治 一三年 一月・三重県津中学校開設 明治 二〇年 四月・滋賀県立彦根尋常中学校開設 明治 一一年 八月・播磨六郡組合立姫路中学校創立 明治 三六年 四月・和歌山県立新宮中学校設置 明治 六年一〇月・第四大学区第十五番変則中学開設 明治 六年一〇月・第四大学区第十五番変則中学開設 | 「第一章・稽古館時代」 「第一章第一節・藩政時代の教育」 「第一篇第一章・創立前史」中の「本県教育の伝統」 「前篇・藩学」 「序篇・本校の源流・第一章・日新館」 「第一篇・七日市藩の時代」 「前篇・藩学時代・寛政四年―明治六年」 「新潟県立村上中学校前史」 「第一章・草創期の明暗・一、修道館時代」 「第一章・前史」 「第一章・創立篇、第一節・明道館、第二節・明新館」 「第一章・武生前史、明治以前の武生地域の教育制度」 「第一章第一節・創立までの歩み」中の「藩校長善館」 「第一章・沼津中学校の設立とその前史」 明治編「序章・静岡中学校成立前史」 「第一章・藩校時習館時代」 「第一章・藩校成章館」 「序章・江戸から明治へ」 「序章」 「第一編・藩饗時代」 「第一章第一節・藩政時代の教育」 「第一章三・藩学「育英堂」の教育」 「一、本校前身時代」 「第一章第二節・歴史的背景」 |

| | | |
|--|--|---|
| <p>『松江北高等学校百年史』</p> <p>『津山高小八十周年記念誌』</p> <p>『福山誠之館中学校沿革史』</p> <p>『修道中学校史』</p> <p>『岩国高等学校九十年史』</p> <p>『山口県立萩高等学校百年史』</p> <p>『山口県立山口高等学校百年史』</p> <p>『輝け道前の群像』</p> <p>『愛媛県立松山東高等学校百年史』</p> <p>『北予中学校沿革誌』</p> <p>『宇和島東高等学校沿革史』</p> <p>『修猷館七十年史』</p> <p>『福岡県立豊津高等学校七十年史』</p> <p>『明善校九十年史』</p> <p>『栄城創立八十周年記念誌』</p> <p>『猶興百年史』</p> <p>『養秀創立八十周年記念』</p> | <p>明治 九年 三月・教員伝習校変則中学校開設</p> <p>明治 二八年 九月・岡山県津山尋常中学校設置</p> <p>明治 一二年 七月・広島県立福山中学校開設</p> <p>明治 三八年 四月・私立修道中学校創立</p> <p>明治 一三年 六月・山口県立岩国中学開設</p> <p>明治 三年 一月・山口藩萩中学開設</p> <p>明治 三年 一月・山口藩山口中学開設</p> <p>明治 三二年 四月・愛媛県立西条中学校開設</p> <p>明治 一一年 六月・愛媛県立松山中学校開設</p> <p>明治 三三年 四月・私立北予中学校創立</p> <p>明治 二九年 五月・愛媛県尋常中学南予分校設置</p> <p>明治 一八年 九月・私立英語専修修猷館創立</p> <p>明治 二〇年 五月・福岡県管理豊津尋常中学校開設</p> <p>明治 一二年 九月・福岡県立久留米中学校開設</p> <p>明治 一一年 四月・長崎県立佐賀中学校開設</p> <p>明治 一三年 九月・猶興書院開設</p> <p>明治 一三年 二月・首里中学校開設</p> | <p>「序章・近代教育の創始」</p> <p>「明治期・津中前史」</p> <p>「第一章・誠之館時代」</p> <p>「第一章・学問所時代」</p> <p>「第一章二・藩校時代」</p> <p>「第一章・藩政時代」</p> <p>「第一章・文教のとしび沢善堂」</p> <p>「明教館時代」</p> <p>「第一章・社団法人北予中学会」</p> <p>年表「第一章」(元禄一六年～明治四年)</p> <p>「第一部前史第一章・藩学時代」</p> <p>「男子校の部・「思永斎時代」「香春思永館時代」</p> <p>「第一章一・藩校時代篇」</p> <p>「佐高(佐中)沿革史一・弘道館」</p> <p>「猶興書院までの平戸の教学」</p> <p>「沿革八十年の歩み・国学時代」</p> |
| <p>『山口高等商業学校沿革史』</p> <p>『記念誌・第七高等学校造士館』</p> | <p>明治 五年 一〇月・山口変則中学開設</p> <p>明治 二〇年 四月・文部省管理・山口高等中学校開設</p> <p>明治 三八年 四月・官立山口高等商業学校開設</p> <p>明治 一七年 二月・鹿児島県立中学造士館設置</p> <p>明治 二〇年 二月・文部省管理・鹿児島高等中学造士館開設</p> <p>明治 二九年 九月・右廃止。同年一二月・鹿児島県立尋常中学造士館設置</p> <p>明治 三四年 三月・右廃止。官立第七高等学校造士館設置</p> | <p>「第一篇・山口明倫館」</p> <p>「第一章・造士館沿革概要」</p> |

同 二〇年・滋賀県立彦根尋常中学校となる。

彦根中学校の起点は明治二〇年。

『富岡高校七十五年史』と『輝け道前の群像』

明治三〇年・群馬県尋常中学校甘楽分校設置。

同 三三年・群馬県立富岡中学校となる。

富岡中学校の起点は明治三〇年。

明治二九年・愛媛県尋常中学校東予分校設置。

同 三二年・愛媛県立西条中学校となる。

西条中学校の起点は明治三二年。

明治の中学校は頻繁な政策の変更と制度改革によって学校体系上の位置づけが変り、それに連動して設置者と名称がめまぐるしく変る。

明治三十二年の「中学校令改正」以後のように設置年月が特定し難いのである。私学から公立学校へ、変則中学や各種学校から正規の中学校へ、郡立学校または県立分校から県立中学校へという途を歩むものが多い。従って起点のとり方に右のような相違が生じるのである。

『彦中五十年史』の編者は述べる。

「わが彦根中学校は今回その創立五十周年を迎へたと言ふものの、それは明治十九年新に中学校令が発せられ、各府県に充実せる府県立中学校一校を設置するといふ一府県一中学校の旨趣に則り明治二十年に至り従来の町立彦根中学校を改めて県立となし、滋賀県立尋常中学校として陣容新に再出発した時を起点として算定したものである。之をわが校の事実から見ると明治九年の第三大学区第十一番中学区彦根

学校を以てその創立とせねばならぬ。即ち本年を以て創立六十一周年と見るのが至当である。更にわが彦根中学校が徳川時代に於ける彦根藩費弘道館をその淵源としてゐる周知の事実よりすれば寛政十一年藩費創始の時を以て起源とすべく、その発祥実に遠く百四十年の昔となるのである。」(同書緒論)

こゝに明治の中学校史の起点算定、淵源といった「沿革史」叙述上の問題が集約的に述べられている。本表では創立、開設、設置という用語を区別して用いた。「設置」が公式用語になるのは明治十四年以後であるから¹⁰⁾十三年以前はこれを用いないことにし、十四年以後でも前身校が県立に移管され時を起点としている場合は「開設」とした。私立、郡立、町立学校は官の設置でないので「創立」としてこれを区別した。

明治の中学校の起点を近世の藩学においては『福井県藤島高等学校百年史』唯一編である。『山口県立萩高等学校百年史』『山口県立山口高等学校百年史』が明治三年の山口藩立中学を起点としたことも注目されるが、右の三編と東奥義塾の明治五年一月創立を例外とすれば他はすべて明治五年の「学制」以後に中学校の起点を置いている。即ち藩学は「前史」として扱われているのである。

前史としての藩学史を中学校史と対等に扱っているのが『沿革史・山形県立米沢興譲館中学校』と『校史・千葉県立佐倉高等学校』である。前者は「前編・藩学」「後編・中学校」として前編は明治五年の米人教師ダラス雇用まで、後編は明治七年の私立米沢中学校から起筆

している。後者は「前篇・藩学時代・寛政四―明治六」「後篇・明治六―昭和三五」と二分して前篇は明治五年の成徳館の閉鎖まで、後篇は明治六年の鹿山学校開設から起筆している。しかるに前者は創立五十年記念であるとして創立年を私立米沢中学校が「中学校令」に準拠した明治十九年とし、後者は創立六十周年記念と銘打ち、私立佐倉尋常中学校が千葉県立佐倉中学校になった明治三十二年を創立年としている。ともに論理に合わない編集である。それを意識して両書は次のような弁解の辞を載せている。

「本校は創立五十年といふけれどもこれは明治十九年中学校令に準拠して組織を改めた時より算したのであって、其初めは遠く元禄の昔上杉綱憲公が学問所を創設せられたのに発してゐる。其の間実に二百三十九年、時に僅かの盛衰はあったけれども教学尊重の美風はよく之を継承存続して今日の我が校に及んだのである。故に本書の内容は単に米沢興讓館中学校の沿革五十年に止らず、上杉藩教学の歴史を語るものである。」（『沿革史・山形県立米沢興讓館中学校』序文）

「学校の内外でよく古い伝統があると言い、校歌にも、あゝ寛政の昔より、と歌って来たし、西に長崎東に佐倉、とよく口伝えているが、それが一体どのようなものであるか、（中略）藩学の伝統をうけついで今日に來た本校のような高校は全国的にも数少ないことであろうが、このような沿革をもつ学校について旧藩校から私立或は公立の学校にどのように移行したかを見ること、このことは日本の教育史上、研究を要する一分野であらうと思う。」（『校史・千葉県立佐倉高等学校』）

後記

こうした意図で編纂された後者は前史に約三分の二に当る頁を与えた異色の「沿革史」である。

創立八十周年を記念して編纂された『時習館史』は前述の如く明治三十三年の愛知県移管時を創立年としているが、次のような構成になっている。

時習館史概観――藩校時習館時代――空白時代――豊橋尋常中学時習館時代――県立第四中学校時代――県立豊橋中学校時代――県立時習館高等学校時代。

注目されるのは「空白時代」という一章を設けていることである。即ち藩校時習館が明治五年に廃止になってから明治二十六年、豊橋町に私立補習学校時習館が開設されるまでの二十一年間を「空白時代」としているのである。しかし『時習館史』は文字通り空白とせず、こゝに宝飯郡立宝飯中学校（明治十四～十九年）の顛末を記している。

宝飯中学校は宝飯郡国府村（現豊川市国府町）に創立されたもので豊橋藩学時習館、豊橋中学校の両者に無縁である。¹¹『時習館史』もその関連性を語らない。故に「空白時代」なのである。つまり藩学時習館の伝統は二十一年間の空白を飛んで尋常中学時習館に連続する。その間、周囲にはこんな中学校があったという叙述である。

以上、「学校沿革史」の編纂形式から藩学と明治の中学校の連続性について考察してきたが、そこからは意識としての連続性が浮かび上るにすぎない。次に事実即して時間的系列の中で連続の有無を検証

しよう。

三

藩学の廃校は一般に次のような段階を踏んで行われた。⁽¹²⁾

- 一、戊辰戦争における藩没収。
- 二、廃藩置県。たゞし県学となつて存続したものも多い。
- 三、頻繁に行われた県統廃合による県の消滅。
- 四、「学制」頒布時に出た旧学校廃止令<sup>○文部省
布達二二号</sup>

中学校は次の段階をへて勃興し、廃絶した。⁽¹³⁾

- 一、明治二年から五年にかけて興起した府藩県の中学。
- 二、「学制」頒布以後、明治十三年までに開設された公私立の変則中学。小学校・師範学校に付設された中学科。中学と認定された私塾。
- 三、明治十四年以後十九年に至る府県立・郡町村立・私立の中学校。
- 四、明治二十年より二十四年に至る府県立・府県管理・私立の尋常中学校。

各段階で異質の中学が勃興するが、次の段階に移る際、廃絶するものも多い。とりわけ明治五年の「学制」を境に府藩県の中学は一たん悉く廃校になる。また明治十四年以降、これまで濫設された変則中学校が淘汰され、十九年の「中学校令」で地方税による尋常中学校は府県一校に制限される。この間に廃校に追い込まれた中学校は多い。

以上をふまえて本論では藩学と中学校の連続性をまず次の三種に区分する。

一〇

第一種・明治五年の「学制」までに廃絶。その後、数年から三十年間の空白の後、藩学の後裔を自認して開設された中学校及びその前身校。

第二種・廃藩によって一たん廃校になるが「学制」実施とともに旧藩学を母胎に再起。数年間継続するが、中学校淘汰策に遭遇して廃校。数年後、再興する断続型の中学校。

第三種・廃藩、「学制」実施という激動期に曲折をへながら連続するが、それぞれの事情で一たん廃校。数年後再開した中学校。

第一種

明治三六年設置・和歌山県立新宮中学校。

明治三四年創立・田原町立成章館→田原町立中学成章館→愛知県立田原中学校。

明治三一年設置・福井県武生尋常中学校→福井県立武生中学校。

明治三〇年設置・群馬県尋常中学校甘棠分校→同県立富岡中学校。

明治二六年創立・私立補習学校時習館→豊橋町立尋常中学時習館
→愛知県立第四中学校→同県立豊橋中学校。

明治二六年創立・私立北予英学校→私立北予中学校→愛媛県立北予中学校。

明治二〇年創立・上諏訪英語会→諏訪郡立諏訪実科中学校→長野県立諏訪中学校。

明治一七年設置・青森県中学校→青森県尋常中学校→同県立第一

中学校→同県立弘前中学校。

明治一三年開設・三重県立津中学校→三重県尋常中学校→三重県立第一中学校。

明治一三年創立・猶興書院→私立尋常中学猶興館→長崎県立中学猶興館。

明治一二年創立・村上中学校→村上私学校→新潟県立新発田中学校村上分校→同県立村上中学校。

明治一二年創立・柳河中学校→私立尋常中学橘蔭学館→私立尋常中学伝習館→福岡県立中学伝習館。

明治一一年開設・静岡師範学校中学課→静岡中学校→静岡県尋常中学校→静岡県立静岡中学校。

明治一一年創立・浅野学校→修道学校→私立修道中学校。

明治九年開設・第三学区第十一番中学区彦根学校→彦根伝習学校→彦根町立彦根中学校→滋賀県尋常中学校→滋賀県立第一中学校→同県立彦根中学校。

明治九年開設・教員伝習校変則中学科→松江中学校→島根県第一中学校→島根県尋常中学校→同第一尋常中学校→島根県立第一中学校→同県立松江中学校。

明治九年開設・広島県公立師範分校→広島県福山中学校→尋常中学福山誠之館→福山尋常中学校→広島県第二尋常中学校→広島県立福山中学校→同県立福山誠之館中学校。

明治九年開設・佐賀変則中学校→長崎県佐賀中学校→佐賀県佐賀

中学校→佐賀県尋常中学校→佐賀県第一尋常中学校→佐賀県立佐賀中学校。

明治七年開設・陶治学校附属変則中学校→高知中学校→高知県尋常中学校→高知県立第一中学校。

空白期間の長短が藩学との連続性の希薄さと濃厚さを表わす一つの目安になると思うが、それだけでは計れない。藩学跡地・校舎・器具書籍の継承と藩学名称の継承も連続性を示す尺度になる。さらに藩学の伝統に対する自負と願望も無視することはできない。以上を考量してまず連続性の希薄なものを右の中から消去しよう。

新宮藩学育英堂と和歌山県立新宮中学校
府中藩学立教館と福井県立武生中学校

七日市藩学成器館と群馬県立富岡中学校

松山藩学明教館と私立北予中学校

高島藩学長善館と長野県立諏訪中学校

弘前藩学稽古館と青森県立弘前中学校

津藩学有造館と三重県立第一中学校

松江藩学修道館と島根県立松江中学校

これらはその地にかつて藩学があったというだけのことです。「沿革史」もそれ以上、ふれようとしない。『水戸一高百年史』のように藩学弘道館と茨城県立水戸中学校の連続性をきっぱりと否定している⁽¹⁴⁾「沿革史」もある。

藩学の器物書籍の継承や教員・生徒の移動等については調査が及ば

ないので、次に藩学跡地・校舎の継承についてみよう。

柳河中学校―柳河藩学伝習館⁽¹⁵⁾、静岡師範学校中学課―静岡藩学舎⁽¹⁶⁾、福山中学校―福山藩学誠之館⁽¹⁷⁾、佐賀変則中学校―佐賀藩学弘道館⁽¹⁹⁾、明治初期の変則中学で藩学跡に開かれたものは右以外にも多い。後述の学校を除けば次のようなものがある。

岩手県立盛岡中学校の前身岩手師範予備学科―盛岡藩学作人館修文所⁽²⁰⁾、秋田県立秋田中学校の前身太平学校変則中学―秋田藩学明德館⁽²¹⁾、福島県田村中学校（短期廃校）―三春藩学明德堂⁽²²⁾、仙石町変則中学（短期廃校）―金沢藩学明倫堂⁽²³⁾、山口県立豊浦中学校の前身豊浦変則中学―豊浦藩学敬業館⁽²⁴⁾、徳島県立徳島中学校の前身徳島師範付属変則中学―徳島藩学長久館⁽²⁵⁾、第十六番中学（短期廃校）―中津藩学進徳館⁽²⁶⁾。

しかし『白亜校百年史』（盛岡中学）も『秋高百年史』（秋田中学）も藩学を「前史」としていない。

村上中学校は旧村上藩の士族団体が経営し、猶興書院、私立尋常中学橘蔭学館、浅野学校はそれぞれ旧藩主が設立したという意味で単なる地縁以上の連続性が意識されたであろう。旧藩主の設立または出資にかゝる中学校は右の外にも多い。後述のものを除くと柳沢保申の寄附による大和の郡山中学校（明治一三年）⁽³¹⁾、青山忠誠による丹波の私立篠山中学学舎（明治九年、後の兵庫県立鳳鳴中学校）⁽³²⁾、大村純雄の寄附による長崎県の大村中学校（明治一七年）⁽³³⁾。

空白期間が長かったにもかゝらず、旧藩学の後身を自負して藩学名を熱烈に求めた三河の成章館と時習館の両中学校については前述した。時習館中学校では旧藩学時代の「時習館」の扁額を開校に際し玄関に掲げたのであった。⁽³⁴⁾旧藩学名を求めた中学校は後述のものを除くと福岡県立中学伝習館、広島県立福山誠之館中学校がある。

彦根学校は旧彦根藩の士族からなる政治教育団体・集義社の旧藩学弘道館復活の熱意と旧藩主井伊直憲の発起によってなったものである。即ち旧彦根藩関係者と彦根町民及び井伊家の寄附金によって建設された。彦根学校は間もなく滋賀県に移管されて伝習学校になるが、明治十三年、県費による彦根中学校開校が議決されると旧彦根藩関係者は猛烈な町立移管運動を起して遂に町立彦根中学校に変更してしまった。町立・郡立から県立学校になるのを昇格とみるわが国の中学校史において希有な例である。こゝには藩学弘道館の精神を彦根中学校が襲うという感情が彦根町の関係者間に流れていたからである。⁽³⁵⁾

第二種

○龍野藩学敬業館……西播五郡立龍野中学校（明治一八年廃止、同三〇年再置）兵庫県立龍野尋常中学校→兵庫県立龍野中学校。

○西条藩学沢善堂……第一中学区変則中学→愛媛県立西条中学校→私立西条中学育英館（明治一九年廃止、同二九年再置）愛媛県尋常中学東予分校→愛媛県立西条中学校。

○会津藩学日新館……若松予科学校→福島県二番中学校→福島県

若松中学校（明治一九年廃止、同二三年再開）私立会津中学校→福島県管理会津尋常中学校→同会津中学校→福島県立会津中学校。

○仙台藩・辛未館……官立宮城外国語学校→同宮城英語学校→宮城県立仙台中学校→同宮城中学校→宮城県尋常中学校（明治二一年廃止、同二五年再置）宮城県尋常中学校→宮城県立第一中学校→同仙台第一中学校。

○福岡藩学修猷館……変則中学修猷館（明治七年廃止、同二一八年創立）英語専修猷館→福岡県立修猷館→福岡県立尋常中学修猷館→同中学修猷館。

○姫路藩学好古堂……第三大学区第二十九番中学勸開学校（明治一一年開設）公立姫路中学→兵庫県尋常中学校→兵庫県姫路尋常中学校→同兵庫県立姫路中学校。

西播五郡立龍野中学校は明治六年十二月、旧龍野藩学館を用いて開設され、七年八月、一たん閉鎖、十一年に再開された。⁽³⁶⁾西条の変則中学は明治六年八月、旧藩学の建物の一部を借りて開校した。旧藩士の洋学校設立運動による。⁽³⁷⁾ともに藩学と中学の空白期間が短く、旧藩学建物を用いたところに連続性がある。姫路中学の前身とされる勸開学校は明治六年十二月、播磨四郡組合が旧藩学好古堂の校舎を買収、移築して開校した。勸開学校の継続期間は不明。明治十一年、姫路中学が開設されるが、好古堂→勸開学校→姫路中学の連続性を示す具体的な証拠は乏しい。『姫中姫路西校百年史』は姫路中学創立以来の教員

・春山弟彦[○]教育史学者が好古堂の教授であったことに連続性を見出そうとしている。⁽³⁸⁾春山作樹の父。

仙台中学の源流とされた辛未館は仙台藩が明治四年五月、医学館跡にたてた英語学校で藩学養賢堂とは別箇である。明治五年十月廃止。同七年、官立宮城外国語学校がこゝに開設された。明治十年、これが宮城県に移管されて県立仙台中学になったのである。⁽³⁹⁾

福岡では明治六年、旧藩学修猷館跡に変則中学修猷館が開設されたが翌七年廃止。⁽⁴⁰⁾明治十八年、旧藩主黒田長薄が旧藩士子弟の教育のために修猷館を再興した。黒田の祝辞に言う。「今般英語専修ノ学校ヲ設立スルニ遭ヒ、祖先ノ遺志ヲ継キ旧昔ノ情義ヲ懷ヒ之ヲ命名シテ修猷館ト云フ」。

若松予科学校・福島県二番中学校と会津藩学日新館の連続性はみられない。日新館との関連性が強くなるのは二番中学校が廃止（明治一三年）されてからである。即ち明治十五年、日新館の再興を擬した私立日新館が開校した。また十九年から会津中学校の設置運動が折田福島県知事を先頭に開始され、会津五郡の有志、旧藩主松平家及び会津出身の官吏等の出資協力によって私立会津中学校が創立された。この時、私立日新館は解散し、資本金五千六百余円の利子を毎年、会津中学校に寄附することにした。折田知事は「夫ノ中学校設立ヲ目シテ日新館ノ再興トシ、或ハ独リ士族ニ私ストナスガ如キハ是真ニ誤謬ノ甚シキモノト謂ベシ」と演舌している。日新館の再興という意識が関係者間に漲っていたからであらう。会津中学校の校章は旧会津藩の旗印

「会」⁽⁴³⁾となった。

第三種

○津山藩学修道館→津山変則中学校→成器中学校……津山中学校
→共立中学校（明治一五年廃止、同二八年再置）岡山県津山尋常
中学校→岡山県立津山中学校。

○静岡藩沼津兵学校→集成舎変則科→公立沼津中学校（明治一九
年廃止、三四年再置）静岡県立沼津中学校。

○宇和島藩学明誠館→普通学校青年舎→宇和島学校青年塾→不
棄学校→変則中学南予学校→宇和島南予中学校→愛媛県立南
予中学校→同第三中学校（明治一九年廃止、同二四年開設）私立
宇和島明倫館→愛媛県尋常中学校南予分校→愛媛県立宇和島中
学校。

○福井藩学明道館→同明新館→福井中学→第二大学区連区福井
中学→福井明新中学（明治九年廃止、同一二年開設）福井公立明
新中学→福井県福井中学校→福井県尋常中学校→福井県立福
井中学校。

○久留米藩学明善堂→同洋学校→三潞県立宮本中学校→私立宮
本中学校（明治七年廃止、同一二年開設）福岡県立久留米中学校
→仮設久留米尋常中学校→私立久留米尋常中学校→福岡県管
理久留米尋常中学明善校→福岡県立中学明善校。

津山変則中学校は明治五年九月、旧藩学修道館に開かれた。前掲の

如く断続的に連なり、十三年の空白期間を置いて再び元修道館校舎を
用い津山尋常中学校が設置されたのである。⁽⁴⁴⁾

沼津兵学校は国軍の創成によって壊滅するが兵学校附属小学校の教
師・江原素六によって集成舎が起り、その変則科が沼津中学校になっ
た。兵学校附属小学校の生徒は集成舎変則科から沼津中学校へと移る。⁽⁴⁵⁾
明治十九年、沼津中学校廃止。沼津に同名の中学校が再置されるまで
十五年の空白期間がある。しかし爾後の沼津中学校も兵学校を源流と
し、事あるごとにその精神を語り、それが校風になった。⁽⁴⁶⁾

宇和島藩学と南予中学校の間には間断なく中等教育機関が存在した。
南予中学校の開設には旧藩主伊達家の資金援助があり、十九年の廃止
時、後身として立った私立宇和島明倫館は旧藩学の名称を襲ったので
ある。⁽⁴⁷⁾

久留米藩洋学校は明治四年五月開設。五年、三潞県の柳川洋学校と
合併して宮本中学校となった。七年十二月廃止。十二年九月、旧藩学
明善堂に仮偶した久留米師範学校校舎に久留米中学校として再生した。
久留米中学校の初代校長は宮本中学校の算術教師梅野多喜蔵で、同校
が廃止の命を受けた明治十九年、仮設久留米尋常中学と称し、旧藩主
有馬家及び有志の寄附金で維持し続けた。⁽⁴⁸⁾二十二年、旧藩学の名称を
襲い久留米尋常中学明善校と称した。

福井の明新中学は明治九年廃止になるまで藩学から間断なく連続し
た。明新中学の廃止によって福井の小學生は進学に支障をきたしたの
で明治十二年、旧藩主松平家と有志の寄附で福井中学校が再開した。⁽⁴⁹⁾

空白期間はわずか三年であった。「福井藩学事起源之概略」⁽⁵⁰⁾ 明治十七年筆は藩学と中学の連続性を強調している。

四

○弘前藩学稽古館漢学寮英学寮→弘前漢英学校→東奥義塾→東奥義塾中学校→同文学専門科予科→同高等普通学科→同尋常中学部→弘前市立弘前中学東奥義塾→青森県立弘前中学東奥義塾→(大正二年一たん廃校)

○米沢藩学興讓館洋学舎→置賜県外国語学校→私立米沢中学校→山形県管理米沢尋常中学校→同米沢尋常中学興讓館→山形県立米沢中学校→同県立米沢興讓館中学校。

○佐倉藩学成徳館→印旛県立学校→鹿山精舎→私立鹿山中学校→私立佐倉集成学校→私立佐倉尋常中学校→千葉県立佐倉中学校。

○高田藩学修道館→柏崎県柏崎学校高田分校→私立高田分校→新潟学校高田第四分校→高田仮学校→高田学校→私立高田尋常中学校→町村立高田学校→中頸城総町村組合立中頸城尋常中学校→新潟県立高田中学校。

○名古屋藩洋学校→第二大学区第一番仮変則中学成美学校→官立愛知外国語学校→同愛知英語学校→愛知県中学校→愛知県尋常中学校→愛知県第一尋常中学校→愛知県立第一中学校。

○鳥取藩学尚徳館→鳥取県立洋学所→第四大学区第十五番変則中

学→鳥取中学校→公立鳥取中学→鳥取県立中学校→鳥取県尋常中学校→鳥取県立第一中学校→鳥取県立鳥取中学校。

○岡山藩学新建学校→普通学校→私立遺芳館→岡山県師範学校変則中学科→岡山中学校→岡山学校→岡山県尋常中学校→岡山県立岡山中学校。

○岩国藩学養老館→岩国学校公中学→錦見小学変則中学→岩国変則小学→岩国中学→山口中学校岩国分校→岩国高等小学校別科→岩国学校→山口尋常中学岩国分校→山口県立岩国中学校。

○山口藩学萩明倫館→山口藩萩中学→萩中学校→山口県立萩変則中学校→萩変則小学校→巴城学舎→私立山口中学校萩分校→山口県立萩中学→山口県立山口中学校萩分校→萩高等小学校別科→萩学校→山口県尋常中学校萩分校→山口県立萩中学校。

○山口藩学明倫館→山口藩山口中学→山口県山口変則中学→山口変則小学→鴻城学舎→私立山口中学校→山口県立山口中学校→文部省管理山口高等中学校。

山口高等中学校付属山口学校→山口県尋常中学校→山口県立山口中学校。

○松山藩学明教館→松山県学校→七番学校洋学科→英学舎→英学所→北予変則中学校→松山中学校→愛媛県第一中学校→愛媛県管理伊予尋常中学校→愛媛県尋常中学校→愛媛県立

松山中学校。

○小倉藩学思永館→豊津藩育徳館→大橋洋学校→私立育徳学校
→第五大区第三十五番中学育徳学校→福岡県立豊津中学校
→福岡県管理豊津尋常中学校→福岡県立豊津中学校。

○鹿島藩学徳讓館→弘文館→鍛造館→鹿島県鍛造館→義塾
→変則中学→長崎県鹿島中学校→佐賀県鹿島中学校→公立
鹿島中学校→郡立尋常中学校→私立鹿島英語学校→私立鍛造
館→佐賀県尋常中学校鹿島分校→佐賀県第二中学校→佐賀県
立鹿島中学校。

右の十三校は第四種とも言うべきもので藩学から明治後期の中学校
まで曲折をへながらも間断なく連続したものである。たゞし一年程度
の空白は休学とみなして閉校としなかった。

藩学を襲名したものは米沢興讓館中学校と明治初期の三十五番中学
育徳学校の二校に過ぎないが、藩学校旧跡との関係は濃厚で使用期間
の長短こそあれ、いずれも旧藩学校校舎に拠っている。たゞし愛知一
中の如く、藩学明倫堂でなく藩立洋学校校舎に拠ったものも含んでい
る。旧藩主との縁故も強い。即ち東奥義塾、米沢興讓館中学校、佐倉
中学校、鳥取中学校、豊津中学校、鹿島中学校はそれぞれ旧藩主出資
の基金によって継続し得たのである。山口県下の中学校の如きはすべ
て毛利家、吉川家の出資を基に独自の進学体系をつくり、その運営機
関として防長教育会を組織するが本論では論述を避ける。

旧藩学校舎により旧藩主の出資ともなれば勢い生徒は旧藩士族の子

弟ということになろう。松山中学校の前身・松山県学校は「専ら士族
子弟ノ就学セルヲ以テ世人之ヲ士族学校ト称⁽⁵¹⁾」したのであり、佐倉中
学校の前身・集成学校の開設に尽力した同郷義捐会は「専ら旧藩子弟
ノ資力乏シキ者ニ学費ヲ給シテ陸海軍ノ学校ニ入ラシメ⁽⁵²⁾」ることを目
的とした。本論にあげた中学校の生徒全体の調査は及ばないが一斑を
以ておよその推察はつこう。

明治前期から藩学との連続性が公認されていたものは東奥義塾と米
沢中学校である。

東奥義塾については「東奥義塾来歴」⁽⁵³⁾「青森県年報」⁽⁵⁴⁾「近
世日本教育概覧」⁽⁵⁵⁾「日本教育史資料三」⁽⁵⁶⁾に述べられており、
米沢中学校については「学区巡視功程」⁽⁵⁷⁾「近世日本教育概覧」⁽⁵⁸⁾
にある。

〔前略〕我旧藩稽古館アリ寛政年間ニ創建スル処ニシテ従来和漢諸
般ノ学ヲ講セリ。次テ蘭英ノ学ヲ兼ルト雖其規程ニ至リテハ実ニ当時
ニ適セザルノ憂アリ。是ニ於テ黌舎ヲ弘前青森ノ二ヶ所ニ開キ藩内書
生ノ俊秀ナル者ヲ撰ビ聘スル所ノ教師ニ就キ学費ヲ給シテ新黌ニ寄宿
勉学セシム。既ニシテ二閏年、会々廃藩ノ令出ルヲ以テ公モ亦去テ東京
ニ移レリ。然レドモ黌舎ハ依然トシテ更ニ新置県庁ノ保護ニ依リ生徒
ハ猶ホ未タ講習ノ道ヲ欠ザリシナリ。明治五年政府新令ヲ発シ一般学
政ヲ改革シ従来官立ノ諸校ヲ廃スルニ及ビ此黌舎モ亦遽然県庁ノ保護
ヲ受ルヲ得スシテ将サニ黌舎ヲ閉チ生徒ヲ解散セントスルノ勢ニ逼レ
リ。此時ニ当リテ我旧藩公深ク之ヲ憂ヒ遂ニ五千金ヲ投シテ学校維持

ノ資本トナサシメシガ諸有志者モ亦此美旨ニ倣ヒ各多少ノ金円ヲ寄セテ此業ヲ賛成セリ。此ニ於テ疊中ノ幹理者協同結社更ニ政府ニ申請シ學則ヲ改良シテ新ニ稱スルニ東奥義塾ノ名ヲ以テシ疊舎ヲ旧軍事務局ニ移シ初メテ外国教師ヲ聘スルニ至リシハ実ニ同年ノ冬ナリキ。(下略)〔東奥義塾來歴〕⁽⁵⁶⁾

「私立米沢学校ハ羽前ノ米沢ニアリ。元禄年間旧米沢藩主上杉氏ノ設立スル所ニシテ専ラ漢学ヲ教授セシガ明治四年以降英学数学ヲ加ヘ七年旧米沢藩士ノ私立ニ改ム。今大学卒業ノ学士ヲシテ教授ノ事ヲ主掌セシム。其教科ハ英語和漢学数学ヲ専トシ兼テ高等ノ普通学科ヲ授ク。資金ハ旧藩主ヨリ交付シタルモノ尙万五千円其他ノ不動産ヨリ生スル利子等合セテ歳入二千八百餘円アリ。(下略)」〔日本近世教育概覽〕⁽⁵⁷⁾

私立米沢学校は明治四年以降、英数学を加えたところがあるが、米沢に洋学舎ができたのは明治四年一月、つまり旧藩時代のことである。⁽⁵⁸⁾藩学と連続すると言いつながら、東奥義塾にしても米沢学校にしても漢学を主体とした近世の藩学に連なったのではなく、明治初期における藩制改革の一環として行われた洋学校に連なったのである。これまで述べてきた藩学と中学校の連続もこの種のものが多く、また漢学系の藩学に連なったものも廃藩、「学制」以降、一たん洋学校に転じてから中学校になったものが多いのである。こうしてみると漢学本位の近世的藩学から「学制」以降の中学校にそのまゝ連結したものは次の例外を除いてないのである。その例外、本論で言う第五種に当るそれは琉球

藩の国学から連結した沖縄県の首里中学校である。

琉球藩の国学は寛政十年に創立した。九十年を経て明治十二年、廃藩置県を迎えた。国学は沖縄県の所轄になったが、すべて旧のまま行われた。県は首里中学校を制度に適合させるべく努力するが順調に進まず、首里中学校は長く例外的な扱いを受けることになるのである。⁽⁵⁹⁾しかし藩学と中学校の連続性という本論の課題からみれば、これこそまさに連結した唯一の例であった。

最後に藩学から中学をへて高等学校(旧制)に連続した二校を表示する。

○金沢藩中学東校・西校→金沢中学校→私立英学義塾→英学校
→石川県中学校→啓明学校→石川県中学師範学校→石川県
専門学校→官立第四高等学校⁽⁶⁰⁾。

○鹿児島藩学造士館→鹿児島藩本学校→准中学校(明治十年兵乱のため閉鎖、同一七年設置)鹿児島県立中学造士館→文部省管理
鹿児島高等学校造士館(明治二九年廃校、同三四年再置)官立第七
高等学校造士館。

中学校としては高等学校造士館が廃校になった後を受けて鹿児島県
管理尋常中学造士館が設置され、鹿児島県立中学造士館となるが、明
治三十四年、第七高等学校設置を機に廃止された。⁽⁶¹⁾

山口藩学明倫館から文部省管理山口高等中学校になるまでの経緯は
前に表示した。明治二十七年「高等学校令」によって山口高等学校と
改称したが、明治三十八年から官立山口高等商業学校に改変して後年

(62)
に続いた。

結 語

「学校沿革史」の記述と実際の両面から藩学と中学校の連続性を考察した。

「学校沿革史」で近世の藩学に起点を置いたのは福井の明新中学一校。明治初期の藩学校に起点を置いたのは東奥義塾と山口中学、萩中学の三校である。他はすべて「学制」以後に起点を置き、藩学は中学校の「前史」に収められている。しかし米沢興譲館中学、佐倉中学、豊橋・時習館の「沿革史」は藩学の伝統を継承するという意識がとりわけ強かった。

連続の実際については時系列を縦糸に、旧藩と中学校との関わりを横糸に交差させた。即ち時系列では間断の長短と空白の時期によって連続性を五種に分類し、各種について藩学遺跡の継承、旧藩主、旧藩士と中学校の関わりを考察して連続性の濃淡、厚薄を量った。時系列だけでみれば琉球藩国学と沖縄県中学校の連結が連続性の最も強いものであるが、廃藩置県が明治十二年に行われた特殊事情、琉球藩の置かれた特異な状況からこれは他と同列に扱えない。

時系列と旧藩との関わりの両面からみれば、本論で述べた第四種と第三種の十八校、つまり若干の間断があり、曲折をへながらも旧藩との関わりを持ちながら明治前期に続いた中学校はまず連続性の濃厚なものと言えよう。たゞし近世の漢学本位の藩学からの連続ではなく、

幕末明治初期に生起した洋学校との連続性が強かったことに注意しなくてはならない。恰も東京大学の前身・開成学校が昌平黉ではなく、藩書調所の系譜をひく大学南校に連続したのと揆を一にする。

次に第二種六校と第一種のうちから連続性の希薄なものとして消去した八校を除いた十一校、計十七校が連続意識を持ったものと言える。「学校沿革史」の記述も所詮は編者・執筆者の連続意識に帰せられようが、「沿革史」の記述と実際の両面から考量して東奥義塾、米沢興譲館中学、佐倉中学、福井中学、山口中学、萩中学が藩学との連続性の最も濃厚なものと言えよう。藩学の襲名も連続意識の強さを示す尺度になろう。米沢興譲館、福井明新中学は重複するが、豊橋時習館、田原成章館、福山誠之館、広島修道館、福岡修猷館、久留米明善校、柳川伝習館、一時的ながら宇和島明倫館、豊津育徳館、鹿島容造館、これらの中学校は時系列における間断の有無にかゝわらず、意識連続としてあげておかねばなるまい。名跡こそつがなかったが、会津、沼津、彦根の中学校に藩学の伝統継承意識が強かったことは本論で述べた通りである。

藩学と明治の中学校との連続性は以上述べた如く実際の連続より意識上の連続が強い。この点、校舎、教師、生徒がそのまま移行して間断のなかった昭和の中学校・高等女学校・実業学校と現高等学校との連結性とは全く異なるものである。しかし郷学・私塾と中学校の連続性にまで拡大すると様相はまた変る。本論は藩学と中学校に限定したが、近世教育と近代教育の連続・非連続性究明の課題はまだ多く残されて

いるのである。

注

- (1) 徳川時代教育史(春山作樹『日本教育史論』一三九頁)
- (2) 春山作樹『日本教育史論』一八一頁。
- (3) 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史第一巻』五五三頁。
- (4) 高橋俊乗『日本教育文化史』(講談社学術文庫本)二二〇—二二一頁。
- (5) 桜井役『中学教育史稿』四九—三一六頁。
- (6) 東都通信社『全国学校沿革史』緒言。
- (7) 志賀正道『岡山藩学校史』序。
- (8) 拙論「学制期における私立中学校と私学観」(日本私学教育研究所調査資料三一・昭和五〇年三月) 拙論「明治後期における私立中学校の設置」(同六五・昭和五四年三月) 拙論「わが国における中学校観の形成」(同四四)(東京文化短期大学紀要四・五・六・昭和五六・五八・六〇年三月) 拙論「明治十四年以前における公立中学校の教則」(二)(国士館大学教育學論叢一・二・昭和五八・五九年一二月)
- (9) 文部省普通學務局「明治四十四年十月一日現在・全国公立私立中学校ニ関スル諸調査」
- (10) 明治十四年一月・文部省達四号・五号
- (11) 武田三夫・山田東作『三河最初の中学校』参照。
- (12) 拙論「明治初期における藩立中学校」(国士館大学文学部人文学会紀要一三号・昭和五六年一月)
- (13) 拙論「明治初期における藩立中学校」(前掲) 同「学制期における私立中学校と私学観」(前掲) 同「明治後期における私立中学校の設置」(前掲) 同「わが国における中学校観の形成」(同四四)(前掲)
- (14) 『水戸一高百年史』(昭和五三年一月刊)五九頁。
- (15) 『日本教育史資料三』三九・四七頁。府県史料・福岡県史料(内閣文庫)
- (16) 明治一三年静岡県年報(『文部省第八年報』一九二頁)
- (17) 「福山中学校沿革略誌」(『日本教育史資料四』三三九—三四〇頁)『福山誠之館中学校沿革史』一三一—一四頁。
- (18) 『佐賀県教育五十年史中』七八—八二頁。
- (19) 『全国学校沿革史』八九七頁。
- (20) 『白亜校百年史通史』三一—一〇頁。
- (21) 『日本教育史資料一』八五七頁。『秋高百年史』一〇頁。
- (22) 『福島県教育史一』二八四頁。
- (23) 「明治十五年學事巡視功程」(『文部省第一〇年報二』六二頁)。
- (24) 拙論「明治初期石川県の学校設置問題」(『地方教育史研究二号』一九八一年)
- (25) 『金沢市教育史稿』二六五—二六六頁。
- (26) 『日本教育史資料二』七四—一頁。
- (27) 『同右』八五七頁。
- (28) 『大分県教育百年史一』二九—一頁。
- (29) 『村上郷土史』一八五頁。
- (30) 『猶興百年史』七頁。『福岡県教育史』三七六—三八〇頁。『修道中学校史』三三頁。
- (31) 『奈良県教育百年史』三九頁。
- (31) 『鳳鳴中学五十年記念誌』三頁。
- (32) 稿本「大村郷土誌」(佐世保市立図書館蔵)

- (33) 近藤恒次『時習館史』二二八頁。
- (34) 『彦中五十年史』八〇—一二四頁。
- (35)(40) 府県史料・福岡県史稿(内閣文庫)『福岡県教育史』二二二頁。
- 『福岡県教育百年史』二九二頁。
- (36) 『揖保郡地誌』四二六頁。
- (37) 『愛媛県教育史』四四九頁。
- (38) 『姫中姫路西高百年史』八一—一頁。
- (39) 『宮城県教育百年史』九八一—一〇三頁。拙論「明治初期における官立英語学校顛末」(『アジア文化七』一九八二年)。
- (41) 『修猷館七十年史』四四頁。
- (42)(43) 『会津中学校五十年史』二九頁。五一—七〇頁。
- (44) 『母校のあゆみ・津山高専八十周年記念誌』三四・三五頁。『岡山県教育史中』一八九頁。
- (45) 米山梅吉『幕末西洋文化と沼津兵学校』一〇六—一一〇頁。
- (46) 『沼中東高八十年史上』七—九頁。
- (47) 『宇和島東高等学校沿革史』四九—九一頁。
- (48) 『明善校九十年史』六九—九〇頁。
- (49) 『福井県藤島高等学校百年史』二六—四四頁。
- (50) 『日本教育史資料四』一七六頁。
- (51) 「松山中学校沿革調・明治二十四年」(愛媛県庁文書・愛媛県立図書館蔵)
- (52) 「同郷義捐会規則緒言」(『佐倉高等学校六十年史』一五頁。)
- (53) 『文部省第八年報二』二七六頁。
- (54) 『日本教育史資料三』四〇—一四〇九頁。
- (55) 『文部省第五年報一』二六頁。
- (56) 「東奥義塾来歴」(弘前市立図書館蔵)
- (57) 明治二十年十二月・文部省総務局『日本近世教育概覧』一九二頁。
- (58) 『山形県立米沢中学校沿革史』六一頁。
- (59) 『養秀創立八十周年記念』一八一—一九頁。安里彦紀「沖繩における廃藩置県前後の教育」(『地方教育史研究三』一九八二年)
- (60) 「石川県啓明学校沿革及学規」(『文部省第三年報一』二四五—二四七頁)『日本教育史資料二』一五九—二四六頁。『同上四』一八二—二〇八頁。『金沢市教育史稿』二五〇—二六九頁。
- (61) 「記念誌・第七高等学校造士館」三二—三七頁。「造士館沿革概要」(『資料集成旧制高等学校全書五』七七—七八頁。)
- (62) 『山口高等商業学校沿革史』三一—三三八。五〇—九一五四三頁。
(本学教授・教育学)